表紙のことば

登山部

那須高明

初めに、私ごとで恐縮だがこの三月で定年退職になった。教職に志を立てた頃の初心に比べれば随分と悔の残る幕切れではあるが元気な気持で退職の挨拶をすることができた。多くの教職の仲間に支えられ、信頼できる人達との絆があったからだと思う。さらに大きな原因は生徒が与えてくれた数えきれない程の感動があったということのように思う。ややもするとマンネリ化する学校生活では生徒や職場のあれこれが不満の原因になる。生徒との関係も表面的に流れる。しかし本気になって、汗水流す思いで生徒とつき合うと自分の知らない新鮮な人間像を生徒の中に発見することができる。担当した分掌のうち一番長かった生徒係の仕事をしてそのことを痛感した。

近年、この辺の高校では登山部の入部希望が増えているそうだ。大きな自然の中で一月、二月と仲間と一緒に生活することが出来る部活は外のクラブではそう多くない。昔と比べれば装備は良くなったしザックの中の食糧の目方も軽くなったし、交通手段も便利だからそれ程苦しい思いをしなくてもよくなってはいるだろうが、それでも今の生徒にしてみれば山行は半端じゃない。計画を立て、目標を定め分担し、安全を確認して出発しても思いがけない自然の厳しさに出会う。

生徒どうし、生徒と顧問が同じ試練の中で深い相互理解が生れる。

入部希望が増えた登山部がますますいい活動をして欲しいと思う。

そして学校生活のすべてに山登りのセオリーを取り入れ、相互理解と人間発見の感動中で学問の峰をめざす営みができないものかと思う。

（なす　こうめい＝長岡大手高校講師）

在の教育が行われている。なぜ子どもたちと直接関わりのないような事柄に、教育者ともあろう者が血道を上げねばならないのか。地位・名声を優先させる俗物たちが学校を思うままにすれば、職員・生徒の伸びやかさは失われ教育の質が低下するのは当然である。M中学校ではH校長の気にそまないという理由だけで、文化祭時の生徒自主参加のステージは廃止され、以後講演会に切り換えられた。学閥学校の頂点に立つ者は、生徒の喜びを摘み取るのも意のままなのである。何という危険な教育であろう。

教育後進県を脱するためには、旧時代の遺物である「学閥」解体が避けて通れぬ急務なのである。

（いいだ　やすひこ）